

## 追悼 佐藤健さん

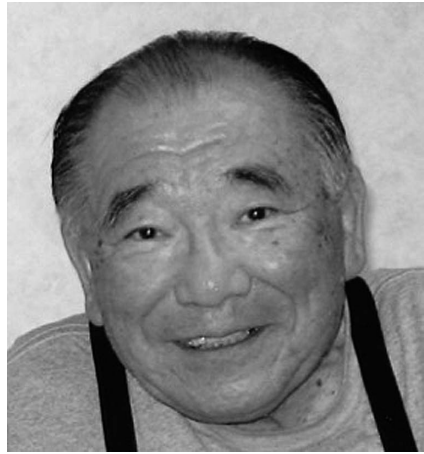
## 佐藤健さんを偲ぶ

田邊健茲 (岡山理科大学・名誉教授)

天文学の普及を中心に多方面で活躍、貢献をされた佐藤健さんが3月4日に逝去されました。享年79歳(80歳目前)でした。今年いただいた年賀状で、病気と闘っておられることは知っておりましたが、ご家族からの訃報で、え、こんなに早く、というのが偽らざる心境です。

佐藤さん(私たちは健(けん)さんと呼んでいましたが、たけしさんが正しい)との出会いは私がまだ大学院生(広島大学理論物理学研究所・宇宙論研究室)の頃でした。内海和彦さん(当時広島大学助教授)の研究室へ行った折、お会いしたのが1973年頃、と思います。

そのころ健さんは広島電鉄の社員だったと記憶しています。話好きで、豪放で、次々天文に関する話題が飛び出して圧倒され、すごい人だと思いました。その中でも記憶に残るのはすべてのUFOはUFOではない(全部正体がばれている)、ということ、それと口径4cm(焦点距離1m)の屈折望遠鏡で木星の縞が6本見えた、ということでした。実は私も子どもの頃、全く同じ五島光学の4cm望遠鏡をもっていたのですが、がんばっても2本より多くは見えなかったと思います。さすが、木星のスケッチの専門家、という驚きと、え、本当?という火星の運河的疑念が交錯しました。しかし健さんは人間の目の分解能の極限(Dawesの限界; 口径4cmならば約3秒角)に常に挑戦してこられました。これは望遠鏡の設計・製作と観測



佐藤健氏(令息・佐藤康臣氏より提供)。

天文学の間の基本的関係と思います。

その後(1980年頃)、健さんは広島市の基町(原爆ドームのすぐ北)に創設された広島市こども文化科学館プラネタリウム室の室長として、念願の天文学普及の最前線に立つことになりました。

私は日本の宇宙論研究のパイオニア・成相秀一(1924-1991)教授のもとで学位を取得後、広島大学教授だった\*1村上忠敬(1907-1985)先生が校長をしていた専門学校で教えていましたが、あるとき(1982年頃)私が子どもの頃宮崎県延岡市に居たという話をすると、村上先生が「佐藤君も延岡だったよ。」といわれたのでびっくりして電話すると、何と健さんは私が住んでいた旭化成の社宅の2筋北に居た、ということがわかり、どこ

\*1 佐藤さんは広島大学教育学部(前身は広島高等師範学校)理科・地学出身で、天文が勉強できるとして入学したのに在籍した理学部地学教室ではできなくて、教養部教授だった村上忠敬先生(広島大学名誉教授)に弟子入りした。

かです。出会ったはずですが、といわれ、本当に驚きました。当時私が幼稚園児で健さんは中学生だったから、一緒に遊んだとは思えませんが、われわれはほんの100メートルくらい隔たったところに住んでいました。健さんはすぐに電話で延岡のお父上にその話をしたところ、「あの若い人（私の父のこ）の息子さんが理学博士なのか」と感慨深げに言われたそうです。

同じころその成相教授還暦記念の研究会が竹原市で開催された折に、ちょうど広島大学理学部教授として赴任された素粒子論の牟田泰三さん（のち、広島大学学長。私が京大理学部物理学科の学生だったころ力学演習を担当。だから、私の先生というべきか）が出席されていて、懇親会で私に「ほかの人の話はわからなかったが、あなたの話だけは理解できた。」ということと併せて、「昔知り合いだった佐藤たけしさんは、楽々園のプラネタリウムがつぶれたあと、いまどうされているのかご存じですか。」と聞かれて、健さんは「たけし」さんというのが本当なんだ、と知りました。その後、村上先生夫妻を囲み、健さん、内海さん、牟田さん、健さんの同僚であった加藤一孝さん、そして私でパーティーをもったのは懐かしい思い出です。

佐藤さんは、広島市のプラネタリウムに勤め始めてから、「広島市4メートル望遠鏡計画」というものを発表して、皆を驚かせました。真意を尋ねると、予算100億円あればできるから、地方自治体でも建設可能だ、という話でした。この計画は実現しませんでした。それが刺激になって、私が設計・建設にかかわった美星天文台1.01メートル望遠鏡、牟田学長が推進された広島大学の1.5メートル望遠鏡、そして、おそらくは8.2メートルすばる望遠鏡の完成をも促進させたであろうことを考えると、大きな意義があったと思います。また、美星天文台建設前の1989年に美星町光害防止条例の制定に尽力されたことは永く記憶されるべきでしょう\*2。

佐藤さんは小惑星の命名に関するIAUの委員会の日本のエージェントでした。2003年9月に佐藤さんの推薦（仲介）で小惑星9099にKenjitababeが命名されましたが、とてもうれしく、そしてありがたいことと思いました。

もっと健さんといろいろなお話をしたかった、と今さらながら残念な思いでいっぱいです。せめてこの追悼文が健さんの霊に届きますように、と願っています。

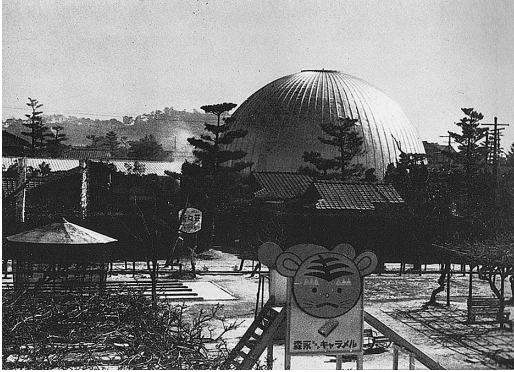
## 佐藤健さんとプラネタリウム

加藤一孝（元広島市こども文化科学館館長）

私と、佐藤氏との濃厚な出会いは、1974年県内の四つの天文団体が合流し出来上がった“広島天文協会”の発足から始まります。“広島天文協会”の発足にあたり当時広島大学の村上忠敬先生と佐藤健氏のお二人が会の顧問という立場で存在されておられてからです。

当時、会のメンバーである広島市中央図書館の副館長の末野忍氏の計らいで、毎月当図書館で開かれる月例会に出席され、楽しく面白いお話をされておられたものでした。当初は氏の専門である木星のお話や最新の天文事情などのお話をされており、毎回新鮮なお話や初の人工衛星であるス

\*2 このあたりの詳しい事情は健さんの自伝「昭和13年早生まれ」という冊子に記載されています。なお、このときの会議には本田寛さんも出席、発言されました。



楽々園遊園地プラネタリウムの18 mドーム。広島電鉄社内報「輪宛」1960年3月号表紙より。広島電鉄(株)提供。

プートニクの観察など、思い出話などを聞かせていただくのが楽しみでした。その後“UFO”の話が中心となり、当時尾道に出現したという“UFO”のこともあり、会合の度にその話題をされて、それなりに楽しいひと時を過ごしたものでした。

その後、会としていろいろな天文イベントなどを実施させていただく中で、個人的にも親交が深くなっていきました。そして1970年代の後半になると、「新しく広島市にできるプラネタリウムの計画があるが、一緒にやりませんか？」とのお誘いを持ち掛けられ、私は勤めていた高校を退職し佐藤氏と二人でプラネタリウムを担当することになりました。

当時の佐藤氏は、地元の企業である広島電鉄(株)の社内報(社誌名は“輪宛”)担当という立場でした。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、広島電鉄は1960年3月に電鉄が運営する楽々園遊園地の中に、18 mドームのプラネタリウムを設置し、続けて27 cm反射望遠鏡が入ったドームの天文台を建設しました。その運営の一人として佐藤氏が学生時代からかかわっておられました。そして1971年に楽々園遊園地が閉鎖となったため、佐藤氏は広島電鉄社内報の担当に変わられて

います。社内報担当という職場の特性もあり、また氏のフットワークの良さもあり、いろいろなどころに出向かれて社内の行く先々の職場で天文の話懇切丁寧にされていたようです。そのため社内報の取材対象となった社員からは“仏の佐藤”とのニックネームも授かっておられたようです。

そして1980年5月には子どものための博物館として“広島市こども文化科学館”<sup>\*3</sup>が開館し、そのプラネタリウム部門の室長として佐藤氏はプラネタリウム(天文)人生の再スタートを切られました。

今では当たり前のことですが、当時フルオートのプラネタリウムは数館(ミノルタ館としてはサンシャインプラネタリウムに次ぐ2館目)しかありませんでした。広島市役所においては、プラネタリウムの番組もオートで作ってくれるものなどの誤解があったため、当初その番組を制作する予算は全く組み込んでなく、佐藤氏も私も途方にくれたものでした。しかし全館挙げていろいろと番組を制作する環境を整えていただきプラネタリウムは何とか動き出したのでした。佐藤氏が番組の原案を書き、当時の館長が(なんと放送作家という肩書をお持ちだったので)それをシナリオにし、館の建設にかかわった会社の社長のご子息が作曲を担当し、私が映像とプログラムその他を担当し番組に仕上げるというチームが出来上がり、何とか自主制作番組を作り上げることができました。放送作家の館長や佐藤氏が退職されたのちもしばらくこのような体制で番組制作を続けることができ、100作に及ぶ番組を作ることができました。こども文化科学館のプラネタリウム番組や運営を佐藤氏と一緒に作り上げてきましたが、氏の天文に対する大いなる知識と熱意と人脈がなければ、到底今のような体制は出来上がってはいなかっただろうと思います。改めて佐藤健さんに感謝するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

\*2 現 5-Days こども文化科学館。